

10/12 Sun.

第145回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.145 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

10/14 Tue.

第686回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.686 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
ハープ
Harp
特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

モソロフ
MOSOLOV

モソロフ
MOSOLOV

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

グザヴィエ・ドゥ・メストレ -p.7
XAVIER DE MAISTRE

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

交響的エピソード〈鉄工場〉 作品19 [約3分] -p.10
Iron Foundry, op. 19

ハープ協奏曲 [約38分] -p.11
Harp Concerto

I. Sostenuto
II. Nocturne
III. Gavotte
IV. Toccata

交響曲 第6番 口短調 作品74 〈悲愴〉 [約46分] -p.12
Symphony No. 6 in B minor, op. 74 "Pathétique"

I. Adagio - Allegro non troppo
II. Allegro con grazia
III. Allegro molto vivace
IV. Finale : Adagio lamentoso

10/21 Tue.

第652回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.652 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
チェロ
Cello
第1コンサートマスター
First Concertmaster

グリンカ
GLINKA

ハチャトゥリアン
KHACHATURIAN

[休憩]
[Intermission]

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

北村 陽 -p.7
YO KITAMURA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

幻想曲〈カマリンスカヤ〉 [約7分] -p.14
Kamarinskaya

**チェロと管弦楽のための
コンチェルト・ラプソディ** [約23分] -p.15
Concerto-Rhapsody for Cello and Orchestra

交響曲 第15番 イ長調 作品141 [約42分] -p.16
Symphony No. 15 in A major, op. 141

I. Allegretto
II. Adagio
III. Allegretto
IV. Adagio - Allegretto

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

協賛：大成建設株式会社（10/14）
協力：横浜みなとみらいホール（10/12）

※10/14公演では日本テレビの収録が行われます。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック生命保険株式会社

※本公演では日本テレビの収録が行われます。

10/25 Sat.

第281回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.281 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

10/26 Sun.

第281回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.281 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor

ピアノ
Piano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

ディーリアス
DELIUS

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

エドワード・ガードナー -p.6
EDWARD GARDNER

パヴェル・コレスニコフ -p.8
PAVEL KOLESNIKOV

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

歌劇《村のロミオとジュリエット》から
“楽園への道” [約8分] -p.18
‘The Walk to the Paradise Garden’ from “A Village Romeo and Juliet”

ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 作品23 [約32分] -p.19
Piano Concerto No.1 in B flat minor, op. 23
I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

交響曲 第1番 八短調 作品68 [約45分] -p.20
Symphony No. 1 in C minor, op. 68
I. Un poco sostenuto – Allegro
II. Andante sostenuto
III. Un poco allegretto e grazioso
IV. Adagio – Più andante – Allegro non troppo, ma con brio

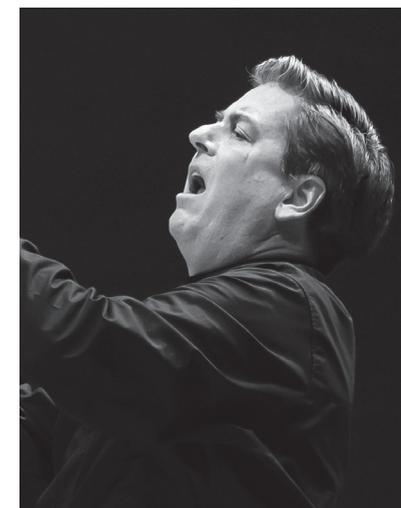
主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮

セバステアーン・ヴァイグレ
（常任指揮者）

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

心震わすサウンド
チャイコフスキー &
ショスタコーヴィチ



©読響

好調を続ける常任指揮者ヴァイグレ&読響が、満を持してチャイコフスキーの傑作《悲愴》や、ショスタコーヴィチ最後の交響曲を演奏。感情の起伏を丁寧に描きながらドラマティックなクライマックスを築く。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴び、04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務めた。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、在任期間中には同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場で《ボリス・ゴドゥノフ》、ウィーン国立歌劇場とバイエルン歌劇場で《ダフネ》、バイエルン国立歌劇場で《影のない女》《ローエングリン》を指揮するなど国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン《最初の人類》を振り、大きな話題を呼んだ。今年3月には読響と《ヴォツェック》を披露し絶賛された。これまでにバイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭のほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団と共演を重ね、今年3月にはベルリン・フィルにデビューした。

10/12
横浜マチネー

10/14
名曲

10/21
定期

Maestro

10/25
土曜マチネー

10/26
日曜マチネー

Maestro

指揮

エドワード・ガードナー

EDWARD GARDNER, Conductor



©Benjamin Ealovega

英国の名匠が振る 情熱のブラームス

シンフォニーとオペラの両方で活躍している英国を代表するマエストロが、ブラームス、チャイコフスキー、ディーリアスの3つのロマン派作品を披露し、読響から豊潤な響きを引き出す。

1974年、グロスター生まれ。ケンブリッジ大学および英国王立音楽アカデミーで学んだ後に、ハレ管の副指揮者やグラインドボーン・オペラ・ツアーの音楽監督などを務めて頭角を現した。2007年から15年までイングリッシュ・ナショナル・オペラの音楽監督として高い評価を得たほか、09年にはローレンス・オリヴィエ賞最優秀オペラ賞を受賞、12年には音楽への貢献によりOBE勲章を受勲。21年からは、ハイティンク、ショルティ、メスト、マズアら巨匠が歴任した名門ロンドン・フィルの首席指揮者を務め、多彩なレパートリーで腕を振っている。24年からはノルウェー国立歌劇場の音楽監督も務めている。

これまでにニューヨーク・フィル、バイエルン放送響、ベルリン国立歌劇場管、クリーヴランド管、ウィーン響、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管などの欧米の楽団に客演。母国英国では、2010年から16年までバーミンガム市響の首席客演指揮者を務めたほか、BBC響とも度々共演し、BBCプロムスにおける「第一夜」と「最終夜」の両方を担うなど活躍している。オペラでは、メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラ、バイエルン国立歌劇場などで〈ドン・ジョヴァンニ〉〈ルサルカ〉〈ピーター・グライムズ〉など幅広いレパートリーで手腕を発揮している。読響初登場。



©Nikolaj Lund

ハープ

グザヴィエ・ドゥ・メストレ

XAVIER DE MAISTRE, Harp

“世界最高峰のヴィルトゥオーゾ”と評されるハープの名手。1973年フランス生まれ。9歳からハープを学び、1996年にバイエルン放送響に入団。98年USA国際コンクールで優勝。99年から2010年までウィーン・フィルのソロ・ハープ奏者を務め、数々の巨匠と名演を残す。ソリストとして、プレヴィン、ラトル、ガッティ、ラザレフらの指揮でウィーン・フィル、バイエルン放送響、パリ管、モーツァルテウム管、イスラエル・フィルなどと共演。ザルツブルク音楽祭やウィーン芸術週間など主要な音楽祭に招かれ、輝かしい音色と超絶テクニックで世界各地の聴衆を魅了している。22年にシュトゥツマン指揮ケルンWDR響とのハープ協奏曲集のアルバムをリリースし話題を呼んだ。読響とは16年、17年、23年に共演し、好評を博した。

世界へと羽ばたく新星チェリスト。2024年、エネスコ国際コンクールチェロ部門で日本人初の優勝。同年パブロ・カザルス国際賞第1位。2023年、ブラームス国際コンクール、日本音楽コンクールでも優勝を果たす。歴史あるイギリスの弦楽器専門誌『The Strad』において「卓越した音楽的才能の持ち主」と評される。現在ベルリン芸術大学でイエンス＝ペーター・マインツ、桐朋学園大学にて特待生として堤剛各氏に師事。2020年、ユリアン・シュテッケルの代役で井上道義指揮の読響と共演し好評を博す。2025年、ホテルオークラ音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、出光音楽賞を受賞。使用楽器は、上野製薬株式会社より貸与された1668年製カッシーニ。



チェロ

北村 陽

YO KITAMURA, Cello

10/12
横浜マチネー

10/14
名曲

Artist

10/21
定期

Artist

10/25

土曜マチネー

10/26

日曜マチネー

Artist



©Eva Vermandel

ピアノ

パヴェル・コレスニコフ

PAVEL KOLESNIKOV, Piano

独創的な解釈で繊細かつ詩的な演奏を繰り広げ、欧米で注目を浴びる新星。1989年シベリア生まれ。カナダのホーネンス国際コンクールで優勝。ロンドンを拠点とし、ロンドン響、BBC響、バーミンガム市響、ロンドン・フィル、バルセロナ響、ロシア・ナショナル管、トロント響などと共演。世界各地でリサイタルを開催し、『ザ・テレグラフ』紙から5つ星の評価を受け「最も忘れがたいコンサートのひとつ」と絶賛された。BBCプロムス、オールドバラ音楽祭などに出演。ハイペリオン・レーベルからCDをリリース。コンテンポラリーダンス界の大御所A. T. ドゥ・ケースマイケルに指名され、ウィーン芸術週間をはじめ欧州各地でJ. S. バッハ〈ゴルトベルク変奏曲〉で共演し、話題を呼んだ。読響とは2022年9月以来、2度目の共演。

モソロフ

交響的エピソード〈鉄工場〉 作品19

20世紀初頭から1930年代初頭にかけて、とりわけロシア革命（1917年）前後に出現したロシアの前衛的芸術運動「ロシア・アヴァンギャルド」は、文学、絵画、演劇、建築、音楽などにおいて様々な展開をみせた。これは、未来主義、シュプレマティズム（至高主義）、構成主義などの潮流の複合体であり、音楽においては、12半音を体系的に組織化したニコライ・ロスラヴェッツとともに、アレクサンドル・モソロフ（1900～73）がその代表的な作曲家だった。

キエフ（キーウ）の裕福な家庭に生まれたモソロフは、ポリショイ劇場歌手の母親から音楽の手ほどきを受けた。すぐに音楽の道には進まず、革命後の内戦では赤軍に参加した。健康上の理由で除隊後、1922年にモスクワ音楽院に入学した。レインゴリト・グリエールとニコライ・ミャスコフスキーに師事し、音楽院在学中の24年には現代音楽協会の主催で作品展が開かれるなど、才能は早くから注目されていた。1925年に音楽院を卒業するまでに、同時代のロシアとヨーロッパのモダニズムの技法を吸収し、前衛的な作風を確立させた。

交響的エピソード〈鉄工場〉は、ポリショイ劇場の委嘱で作曲されたバレエ音楽〈鉄鋼〉の一部である。ロシア革命後、国内では急速な産業発展と工業化が進められ、工業的経済発展こそが社会的進歩であると考えられていた。鉄工場の大音響を模倣する、わずか3分ほどのこの小品は、工業化を目指すソヴィエト社会を映し出す。繰り返される音型による不協和音の衝突を積み上げながら、近代的な工場の様子が描き出される。そして、1930年にベルギーのリエージュで開催された国際現代音楽祭で紹介されるとセンセーショナルな成功を収め、彼の名前は世界に広く知られるようになった。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1926年／初演：1927年12月4日、モスクワ／演奏時間：約3分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、中太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、サンダーシート、銅鑼）、弦五部

モソロフ

ハーブ協奏曲

交響的エピソード〈鉄工場〉の成功は、モソロフに国際的な名声をもたらした。その一方で、ソビエト国内では所属する現代音楽協会と対立するプロレタリア音楽協会から激しく攻撃を受けた。やがて現代音楽協会は活動停止を余儀なくされ、モソロフは、1930年代前半には中央アジアやカフカス地方の民謡調査に携わり、その成果を創作に採り入れるなど、保守的な作風へと転じていった。1936年に公共の場で暴行事件を起こして作曲家同盟を除名となり、翌年には反革命活動を理由に逮捕された。8年間の労働が宣告され、強制労働収容所で8か月服役したが、恩師のグリエールとミャスコフスキーらの嘆願書によって、42年までの都市追放（モスクワ、キエフ（キーウ）、レニングラード）に減刑された。

奇跡的な生還を遂げたモソロフは、1939年に4楽章から成るハーブ協奏曲を書き上げた。同年に第3楽章が演奏された記録は残るが、全曲が演奏されることはなく忘れ去られてしまった。それから約80年後の2018年にオランダの指揮者アーサー・アーノルドがモスクワのレーニン図書館でモソロフの複数の楽曲の楽譜を発見した。復元されたハーブ協奏曲は翌年、アーノルド指揮のモスクワ響によって初演された。かつては「実験的指導者」と言われたモソロフだが、本作は、ロシア音楽の伝統の継承者とされたグリエールのハーブ協奏曲（1938）にもつながるロマンティックな作品で、民俗的な旋律とハーブの音色と華やかな技巧が際立つ。

第1楽章 ソステヌート〜アレグロ・モデラート〜テンポ・プリモ 堂々とした導入に続き、寂しげな民謡風の主題が示される。ハーブの長大なカデンツァは瞑想的な雰囲気を持続させる。

第2楽章 ノクターン アダージョ 夜の帳が下りて静かに広がる神秘的な音楽。

第3楽章 ガヴォット アレグロ・モデラート 素朴で軽やかな2拍子の明朗な舞曲。

第4楽章 トッカータ アレグロ ハーブの妙技とともに華やかに駆け抜ける。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1939年／初演：1939年、モスクワ（第3楽章のみ）、2019年1月、モスクワ（全楽章）／演奏時間：約38分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、シロフォン）、チェレスタ、弦五部、独奏ハーブ

10/12

横浜マチナー

10/14

名曲

Program Notes

チャイコフスキー

交響曲 第6番 口短調 作品74 〈悲愴〉

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）の交響曲第6番は、作曲家最後の年の1893年に作曲された。この年も演奏旅行や創作活動に多忙で、6月にはケンブリッジ大学から名誉博士号を授与された。交響曲は半年ほど書き上げられ、作曲者自身の指揮で初演されたが、このとき「悲愴」のタイトルは付されていない。ただ、最近の研究では、初演前から出版社宛の手紙でチャイコフスキー自身がこのタイトルに言及していたことが明らかになっている。

初演からわずか9日後、コレラを発症したチャイコフスキーは、53年の生涯を閉じた。その突然の死をめぐっては当時から様々な憶測を招き、タイトルが謎をさらに深めた。死の翌日、交響曲第6番〈悲愴〉として再演された。悲しみにうごめく序奏、不安と安堵が交錯する主題、優美だがいびつな5拍子のワルツ、勇気を奮い起こして歩みを進める行進曲……。それはまるで、チャイコフスキーの人生を迎えるかのようだ。終楽章が緩徐楽章となるのは交響曲では異例で、沈痛な表情でゆっくりと始まり、むせび泣くようなクライマックスを迎え、死を象徴する銅鑼が響く。追悼演奏となった再演は、この作品を不朽の名作へと押し上げる名演だった。チャイコフスキーの音楽は死の知らせとともにすぐに世界に広まり、誰もがこの予言的な第6番に彼の人生を重ねようとした。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・ノン・トロppo 静かな序奏に続き、ソナタ形式の主部は、苦悩と不安に満ちた第1主題と美しい第2主題が示される。

第2楽章 アレグロ・コン・グラーツィア 優美さと憂鬱が入り交じるワルツ。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 軽快なスケルツォと勇ましい行進曲が交替する。

第4楽章 フィナーレ：アダージョ・ラメントーソ 美しくも悲痛な終楽章。最後はトロンボーン3本とチューバのコラール風の響きを経て、静寂の中に消えるように結ばれる。

（柴辻純子 音楽評論家）

作曲：1893年／初演：1893年10月28日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約46分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、銅鑼）、弦五部

グリンカ 幻想曲〈カマリンスカヤ〉

ロシア芸術音楽の礎^{いしづえ}を築いたミハイル・イヴァノヴィチ・グリンカ（1804～57）だが、その道のりは挫折の連続であった。プーシキン原作によるロシア版ジグ・シュピールともいべきオペラ〈ルスランとリュドミラ〉の初演（1842）は、外国びいきの貴族の不評を買い、さらに翌年にはイタリア・オペラ団が首都サンクトペテルブルクの劇場を独占したことで、グリンカのオペラは早々と演目から外されてしまう。失意のグリンカは国外へと旅立ち、フランスを経てスペインを訪れるのだが、当地のエキゾチックな音楽は、民謡に基づく管弦楽曲という新しい創作の方向性を示唆する。二つの輝かしいスペイン序曲をものしたグリンカの関心は、やがて故郷ロシアの歌と踊りによる管弦楽曲へと注がれることになる。

〈カマリンスカヤ〉の当初のタイトルは“婚礼歌と舞踊歌”であり、この曲の主題に引用された二つのロシア民謡を指している。モデラートの序奏では、婚礼歌「高い山々から」がいくつかの部分に分けられて対位的に展開され、アレグロの主部では、男性の舞踊歌「カマリンスカヤ」を主題として、ロシアの民俗楽器の響きを模しながら目まぐるしく変奏される。実は二つの民謡には共通する旋律の骨格があり、それが後半での序奏の再現によって明らかになる仕掛けである。民謡旋律を動機として扱い、その特徴に^{ふさわ}相応しい展開手法を編み出したこの曲は、以降のロシア管弦楽の発展に大きな影響を与えた。チャイコフスキーは敬意を込めてこの曲を次のように評している——“大きな榎の木のすべてが小さな一粒のドングリに含まれるように、この曲のなかにはロシア音楽の全てが宿っている”。

〈千葉潤 音楽学〉

作曲：1848年／初演：1850年3月15日（露暦）、サンクトペテルブルク／演奏時間：約7分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部

ハチャトゥリアン チェロと管弦楽のためのコンチェルト・ラブソディ

プロコフィエフやショスタコーヴィチと並び、ソ連音楽を代表するアラム・イリイチ・ハチャトゥリアン（1903～78）の独自性は、19世紀ロシア音楽の異国趣味の伝統（ポロディン〈ダツタン人の踊り〉やリムスキー＝コルサコフ〈シェエラザード〉が典型）の作風を受け継ぎ、自らの家系であるアルメニアやカフカス地方の民俗音楽と融合させることで、ソ連という多民族国家におけるこの地域の“国民楽派”の範を示したことにある。その真価は、〈剣の舞〉のような舞台音楽のみならず、規模の大きな交響曲や超絶技巧を駆使した協奏曲において、より一層発揮される。なお、ハチャトゥリアンは1963年2月に初来日し、2回にわたり読響を指揮して自作を披露している。

1960年代に書かれた〈コンチェルト・ラブソディ〉三部作（62年ヴァイオリン、63年チェロ、68年ピアノ）は、48年に「ジダーノフ批判」を受けて公職を退いたハチャトゥリアンが、映画や演劇のための音楽で糊口をしのいだ後、スターリン体制の終焉と思想統制の緩和を受けて、大規模な器楽曲創作に復帰した晩年の代表作である。稀代のチェリスト、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチのために作曲された本作では、全体を通してダイナミックかつ情熱的な独奏チェロが音楽を主導する。“ラブソディ”という題名が示す通り、多彩なエピソードが交替しながら切れ目なく演奏されるが、序奏で提示される民謡風の旋律が、つづくアレグロや主部アダージョの中で和声的・抑揚的に変容しながら音楽の流れを統一していく。アレグロに戻った中間部では、頻りに拍子を変えながら緊張感を高め、トランペットやホルンの強奏によって高揚を迎える。その後はアダージョの音楽がたっぷりと再現され、最後のアレグロ・ヴィヴァーチェでは、主な主題を統合しながら、独奏とオーケストラが畳みかけるように曲を結ぶ。

〈千葉潤 音楽学〉

作曲：1963年／初演：1964年1月4日、ゴーリキー（現ニジニ・ノヴゴロド）／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、打楽器（大太鼓、中太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、シロフォン、銅鑼）、ハープ、弦五部、独奏チェロ

ショスタコーヴィチ

交響曲 第15番 イ長調 作品141

長らくソ連音楽をリードしてきたドミトリー・ドミトリエヴィチ・ショスタコーヴィチ(1906~75)だが、1966年(60歳)に心筋梗塞で倒れて以後、その創作活動は大きな転換期を迎える。相変わらず対外的なソ連の“顔”としての公務をこなしつつも、体力は確実に衰え、創作のペースも落ちていく。他方、西欧の前衛音楽を吸収した次世代の作曲家たちは、従来の社会主義リアリズムとは全く異なる、新しいロシア音楽の地平を開拓しつつあった。人生と創作の終焉、世代交代の波を否応なく意識しつつ、晩年のショスタコーヴィチは、禁じられた12音列(シェーンベルクの技法とは異なるが)まで駆使しながら、自分自身の人生と芸術の集大成にふさわしい孤高の世界へと入っていく。

1971年に作曲された交響曲第15番は、第10番以来18年ぶりに、標題や声楽に拠らない古典的な様式に回帰しており、全体は、ショスタコーヴィチの交響曲創作への回顧的な要素にあふれている。他方、それと一見対照をなすのが、ロッシェニやワーグナーからの引用のコラージュ(既存の素材をそのまま“貼り付ける”現代芸術の技法)や、12半音を用いた主題等の前衛的な手法だが、実はそれらもショスタコーヴィチがこれまで秘かに取り込んできた表現の一部であり、同時代の前衛音楽やソ連音楽界の変動を受けて、いよいよ包み隠さずに現れ出てきたかのようだ。紆余曲折に満ちた創作人生の終点から、過去と現在を俯瞰する(ふかん)ようなこの作品の魅力について、ショスタコーヴィチの教え子で作曲家のボリス・ティシエンコは、次のように評している。「ドミトリー・ドミトリエヴィチの最後の諸作品は、彼の全作品のなかでも、ある特別の様式である。堂々とした名人芸や驚くべき深み、慧眼(けいがん)に加えて、もう一つの洞察、いわば存在の彼岸的な性質が加わった。」

第1楽章 アレグレット ソナタ形式。若い頃のショスタコーヴィチが得意とした辛辣なユーモアが、ここぞとばかりに発揮される。冒頭、フルート独奏が優しく提示する第1主題に対して、トランペットが奏するポルカ風の第2主題や、それにづく木管や弦楽による無機質な対主題は、どちらも12音から構成される。小太鼓とトランペットのファンファーレの合図で始まる展開部では、オーケストラの各セクションが目まぐるしく交替しつつ、聴き手の意表を突く動機展開が繰り広げられ

る一方、いつも変化のない〈ウィリアム・テル〉序曲が唐突に現れる様は、間の抜けた喜劇の登場人物のようだ。

第2楽章 アダージョ 三部形式。前楽章から一転して、沈痛な表情の緩徐楽章。主部では、重苦しい金管のコラールと、独奏チェロによる切々とした12音の旋律が交替する。中間部はトロンボーンとチューバによる葬送行進曲であり、そのクライマックスでは、ショスタコーヴィチ自身の音名象徴(ショスタコーヴィチのドイツ語のイニシャルDSCHは、音階名に置き換えることができ、レミドシとなる)を織り込んだユニゾンの旋律が怒涛のように奏される。謎めいた二つの和音も12音の組み合わせだ。

第3楽章 アレグレット。ショスタコーヴィチらしい冷笑的なスケルツォであり、クラリネットの主題は新たな12音主題の上行と下行である。トリオ後半とコーダに登場する機械仕掛けの時計のような打楽器アンサンブルは、交響曲第4番やチェロ協奏曲第2番でお馴染みの手法である。

第4楽章 アダージョ~アレグレット。中間部に長大なパッサカリアを挟んだ三部形式。ワーグナーの楽劇〈神々の黄昏〉から「運命の動機」と「ジークフリートの葬送行進曲」、〈トリスタンとイゾルデ〉前奏曲など、「愛と死」を連想させる引用のコラージュに導かれて開始されるが、その旋律はやがて古風なロマンスに変わる(〈トリスタン〉前奏曲の冒頭は、グリンカのロマンス〈ゆえなく、私を誘うな〉とも重複している)。

中間部はショスタコーヴィチが偏愛したパッサカリアであり、その主題も交響曲第7番の“侵略の主題”に酷似している。第7変奏での劇的な頂点がクラーター(音塊)によって灰塵に帰した後、短い再現部を経てコーダでは、最期の時を刻む打楽器を背景にこれまでの楽章の主題が次々に回想され、イ長調主和音の鐘の音が、ショスタコーヴィチ最後の交響曲に終止符を打つ。 (千葉 潤 音楽学)

作曲：1971年/初演：1972年1月8日、モスクワ/演奏時間：約42分

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、トムトム、シンバル、トライアングル、カステネット、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、鞭、ウッドブロック、銅鑼)、チェスタ、弦五部

10/25
土曜マチネー

10/26
日曜マチネー

Program Notes

ディーリアス

歌劇〈村のロミオとジュリエット〉から“楽園への道”

イギリスの羊毛業者からフロリダのオレンジ栽培業者へ。フレデリック・ディーリアス(1862~1934)は回り道をたどって作曲家になった。早くから音楽に親しんだディーリアスだが、事業で成功した父親は息子に職業音楽家になることを許さず、家業の羊毛会社に入社させる。1884年、父親は息子をアメリカに送り出し、フロリダの農園でオレンジの栽培に取り組ませた。ここでディーリアスは教会音楽家トーマス・ウォードに出会い、「貴重な知識を得た生涯で唯一の授業」により音楽理論を学ぶ。さらにフロリダの広大な自然環境で味わった孤独感は、ディーリアスの芸術観に大きな影響を与えることになった。

その後、ディーリアスはライブツィヒ音楽院で学び、グリーグと親交を結ぶ。グリーグが父親を説得したこともあり、ディーリアスは1888年にフランスに移って作曲活動に専念する。少しずつ自作を発表する機会を得たディーリアスは、ゴットフリート・ケラーの短編小説を題材としたオペラ〈村のロミオとジュリエット〉を書きあげて、作曲家としての成熟期を迎える。このオペラでは、対立するふたつの農家の息子と娘が恋に落ちるも結婚を許されず、村を去ってともに命を絶つまでの悲劇が描かれる。“楽園への道”は第5場と第6場を結ぶ間奏曲。初演の直前に書き足された。「楽園」とはふたりが死に赴く前にひとときを過ごした村はずれの酒場の名を指す。

オペラ全体はワーグナーの強い影響のもとで書かれているが、この間奏曲にはディーリアス特有の儚きものへの愛着、甘美と憂愁の融合、秘められた官能性を聴きとることができるだろう。作曲者のよき理解者であった名指揮者トーマス・ビーチャムは3管編成の原曲を2管編成に改訂し、独立した楽曲として演奏して、作品を広く知らしめた。本日はこのビーチャム版により演奏される。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1900~01年(オペラ全体)、1906年(楽園への道)／初演：1907年2月21日、ベルリン／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、ハープ、弦五部

チャイコフスキー

ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

今でこそ屈指の人気曲として親しまれているピョートル・チャイコフスキー(1840~93)のピアノ協奏曲第1番だが、初演に至る道のりは平坦ではなかった。初めてピアノ協奏曲の作曲に取り組んだのは1874年。当初、初演の独奏者にはモスクワ音楽院初代院長で盟友ともいえる名ピアニスト、ニコライ・ルビンシテインを考えていた。だが、2台ピアノ版を書きあげてルビンシテインに披露したところ、思わぬ酷評を浴びせられる。「陳腐でどこちない」「ありきたりで低俗」「ほとんど書き直さなければ弾けたものではない」。

失望したチャイコフスキーを救ったのは、ドイツのピアニスト兼指揮者のハンス・フォン・ビューローだった。ビューローは作品を「これほど力強く気高い作品を知らない」と激賞し、アメリカ・ツアーでの初演を引き受ける。ボストンでの初演は大成功を収めた。時とともにヨーロッパでも作品の評価が高まり、ルビンシテインもやがてこの曲をレパートリーに加えるようになった。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo・エ・モルト・マエストーソ〜アレグロ・コン・スピーリト 勇壮なホルンにオーケストラの総奏が応答する冒頭部分はすこぶる印象的だが、この主題は一回きりしか登場しない。ウクライナ民謡に由来するとされる主題を用いて、雄大な楽想が展開される。

第2楽章 アンダンティーノ・センブリチェ 弦楽器のピッツィカート伴奏のつてフルートが清爽な主題を奏で、これに独奏ピアノが応答する。中間部はスケルツォ風で活発。

第3楽章 アレグロ・コン・フォーコ ウクライナ民謡「出ておいで、イヴァンちゃん」にもとづく、弾むような主題を軸に、ピアノとオーケストラのスリリングな応酬が繰り広げられる。次第に白熱し、熱狂的なクライマックスを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1874~75年、79年改訂、88~89年再改訂／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

10/25
土曜マチネー

10/26
日曜マチネー

Program Notes

10/25
土曜マチネー

10/26
日曜マチネー

Program Notes

ブラームス

交響曲 第1番 八短調 作品68

1853年、若きヨハネス・ブラームス(1833~97)はデュッセルドルフのシューマン家を訪れる。ブラームスはシューマンとその妻クララにピアノ・ソナタ第1番を披露し、その才能を強く印象づけた。「この若者は本当に驚くべき世界をあらわにした。……そこには変装した交響曲のようなソナタがあった」。しかし、ブラームスが交響曲を完成させたのは、それから20年以上も後のことである。

1855年、ブラームスは交響曲の作曲に着手したとシューマンに手紙で伝えた。だが、この構想は実現には至らず、作品はピアノ協奏曲第1番へと形を変えた。

1862年、ブラームスはクララ・シューマンの前で交響曲第1番の第1楽章をピアノで弾いて聴かせている。この初期稿では、第1楽章冒頭の重々しい序奏は添えられていない。その後、さらなる長い道のりを経て、ようやく1876年に作品が完成する。

ベートーヴェンの衣鉢^{いはつ}を継ぐ交響曲として、初演は大きな期待をもって迎えられた。「大衆に好まれるというよりは厳粛な作品で、くりかえし聴くことが求められる」という初演の評からは、作品への敬意と若干の戸惑いが伝わってくる。

第1楽章 ウン・ポコ・ソステヌート〜アレグロ ティンパニの連打を伴う緊迫感あふれる序奏に情熱的な主部が続く。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート 淡く柔和な弦楽合奏^{せきばく}に寂寞としたオーボエのソロが続く。後半ではヴァイオリンのソロが活躍。

第3楽章 ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ 通常なら3拍子のメヌエットカスケルトソが続くところだが、2拍子の流麗な楽章が配置される。

第4楽章 アダージョ〜ピウ・アンダンテ〜アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオ アルペンホルン風の旋律や弦楽合奏の高らかに歌うような主題等、多様な要素からなる壮麗なフィナーレ。

(飯尾洋一 音楽ライター)

作曲：1855~76年/初演：1876年11月4日、カールスルーエ/演奏時間：約45分

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トロンバット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部